

保育者からみた 保護者と子どもの変化

○高木早智子 園部浅子 高田綾 大谷光代
浅川弘子 保泉裕美 滝本真理子（親心を育む会）
掛札逸美（保育の安全研究・教育センター）

背景：過去3回の結果報告から

- 埼玉県の保育者有志による「親心を育む会」
 - 親子の絆づくりのために保育園ができること、やりたいことなどあれこれ知恵を出し合い、日々取り組んでいる。一日保育士体験もそのひとつ。他にも、新人保育士のお悩みに他園の主任や園長が答える「新人お悩み相談会」など開催。月一回の定例会は昨年度からオンラインで。
 - ウェブサイト <https://www.oyagokoro-hug.jp/>
- 当初からある問題意識「園で預かっている子どもや保護者が変わってきた、それはなぜか」

～仮説～

保育時間が8時間から11時間になったことが影響しているのでは？

背景：過去3回の結果報告から（続く）

- そこで埼玉県の保育者を対象に、保育時間・子ども・保護者のカテゴリーでアンケート調査を行った

↓ その結果

- * 今の保育時間は子どもにとって長すぎる
- * 子どもの身体的・精神的発達、親子関係への長時間保育の影響を懸念

新たな調査を行い、昨年の報告から「変わった」状況の実態を明らかにすることに取り組んでいる

本分析の目的

保育者は、今の保育をどう感じているのか

過去3年間の調査結果から保育者の多くは今の保育時間は子どもにとって長すぎると感じており、子どもの身体的・精神的発達や親子関係に対する長時間保育の影響も懸念していることが明らかになった。この調査を通して、保育者の意識の中で「子どもや保護者が変わった」と感じていることを科学的な方法で数値化してきたのである。そこで新たに、1998年から20年間の各年の5歳児クラスあたりの、項目別「対応に苦慮した子ども」「対応に苦慮した保護者」の調査を行い、「変わった」状況の実態を明らかにすることを本分析の目的とする。

分析の方法

- 親心を育む会会員園と全国の保育施設。回答が**2000年**まで遡れる**12園**のデータを使用。
(項目の詳細は、同会のサイトから昨年の報告書を参照)
- データは、その年度の年長児とその保護者について、各項目で「対応に苦慮した」人数が何人いたかを数字のみで記入したもの。子どもや保護者の特徴ではなく、その特徴によって苦慮した場合。
- 個人を特定できるデータは一切集めていない。
- 最近値は**2018年**、比較の値としてエンゼルプラン前の年として**1999年**を選んだ。ただし、毎年の数値は変動が大きいため、それぞれ**2017年**と**1998年**の値と平均した。

結果1：大部分の項目が、20年間で2倍以上に

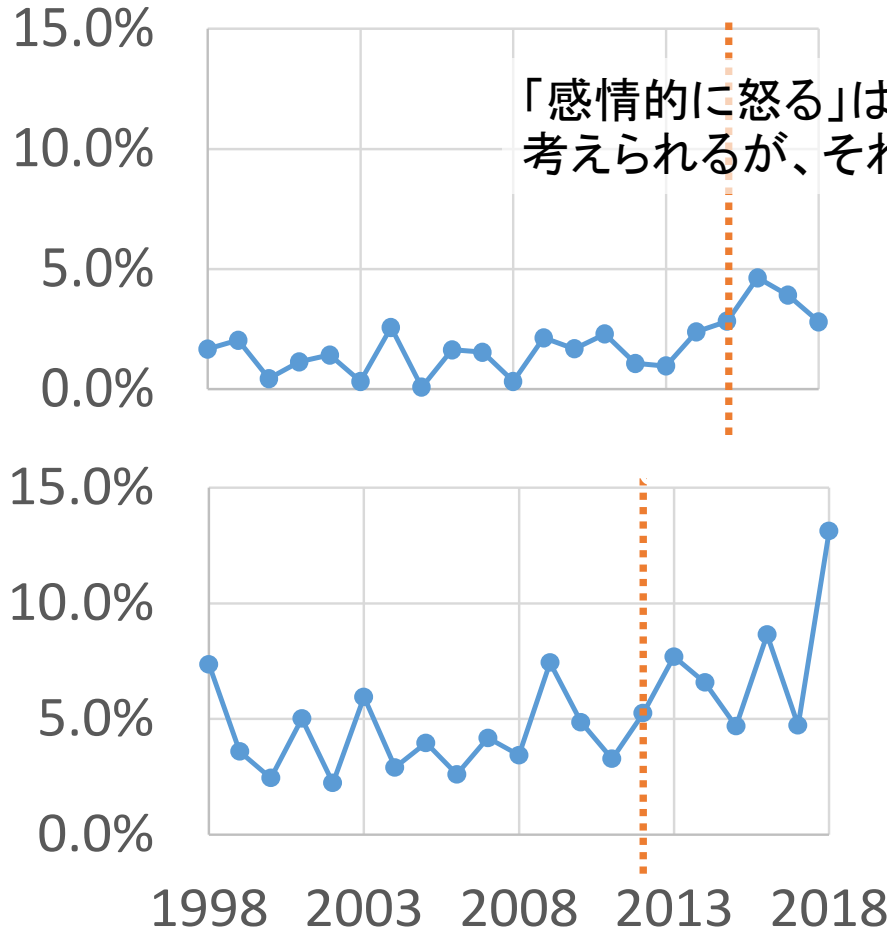
	1998年と 1999年の 平均値	2017年と 2018年の 平均値
子ども		
できごとに感情的反応	1.9%	↑ 4.2%
不安、神経質、鬱等	2.1%	↑ 4.8%
体の不調の訴え	7.8%	5.1%
他者と関わろうとしない	0.6%	↑ 1.7%
集中できない	5.5%	8.1%
攻撃的	1.4%	↑ 3.7%
体幹がしっかりしていない	1.2%	2.3%
興味・気力がない	1.2%	↑ 2.9%
コミュニケーション困難	3.1%	3.7%
言葉が遅い	2.5%	1.7%

	1998年と 1999年の 平均値	2017年と 2018年の 平均値
保護者		
暴力・虐待	0.1%	↑ 1.3%
家庭不安定	2.2%	↑ 4.8%
ネグレクト	2.3%	1.2%
自分勝手	2.3%	4.1%
感情的に怒る	1.2%	↑ 3.5%
不安が強い	0.8%	↑ 4.1%
教育、しつけが厳しすぎる	0.4%	↑ 1.0%
見方に余裕がない	0.7%	↑ 3.6%
子の課題を認めない	0.8%	↑ 3.3%
子どもの言いなり	1.1%	↑ 3.8%
園運営を混乱させる	0.6%	↑ 1.8%

は次スライドに示す項目

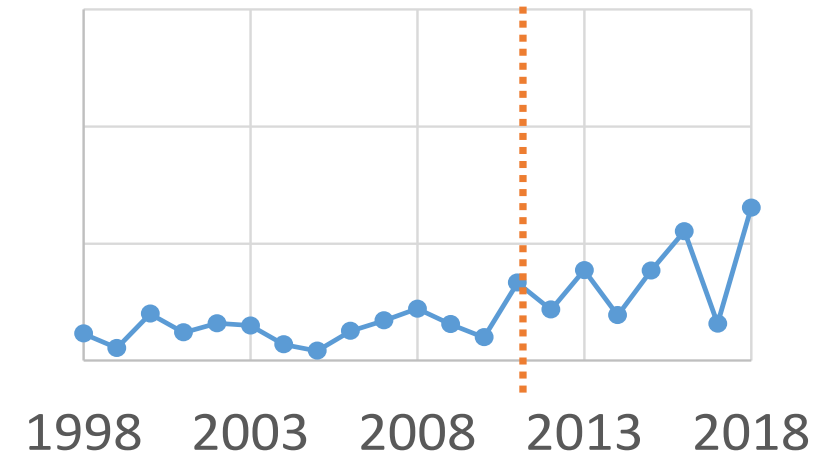
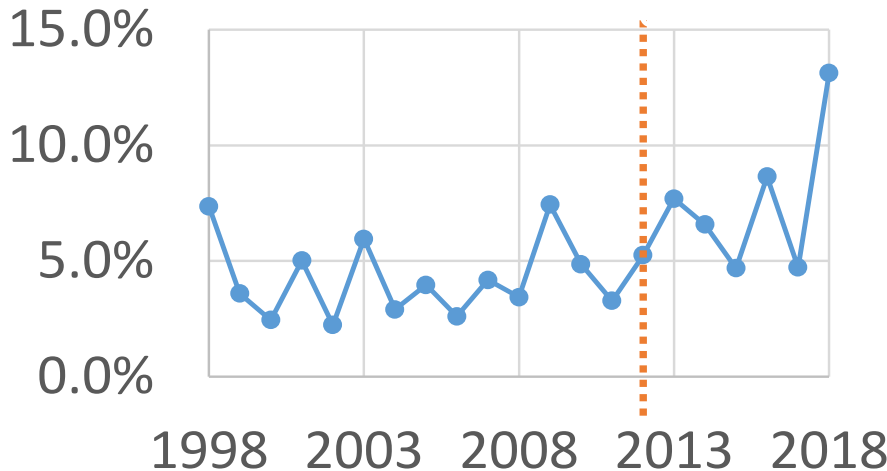
結果 2 : 2010年以降、増加基調に転換

「できごとに感情的に反応する」子どもの割合



「感情的に怒る」は、生得的な部分も大きいと考えられるが、それでも増加基調に見える

「感情的に怒る」保護者の割合



「集中できない」子どもの割合

「子どもの課題を認めない」保護者の割合

結果

- [表1]対応に苦慮した子どもおよび保護者の割合が約20年（1999→2018）の間にほぼすべての項目で2倍以上に増加
⇒ **保育者たちが抱く「保護者や子どもが変化してきた」印象の実体（実質）と言える**
- [表2]『集中できない子ども』の割合が2010年代以降は5%超を維持しながら増加傾向
⇒ **保育者の人手不足から一人ひとりの子どもの興味関心に丁寧に対応できない結果？**
- 『感情的に怒る保護者』『子どもの課題を認めない保護者』
の割合が2010年以降増加傾向
⇒ **保護者対応の困難感,特定の保護者への苦手意識や恐怖感とそれによる精神的負担の増大…保育現場の疲弊の原因**

まとめ

- 変化が見られた2010年ごろ...

1997年児童福祉法改正による保育制度改革

→「措置」から「保護者が保育園を選べる」時代へ

2010年待機児童数が最大になる

→待機児童解消のため、株式会社等の参入を励行

→保育が「福祉」から「サービス」へ転換

○子どもと保護者の変化は、質を置き去りにして、量を増やすことを優先した歪みの表れではないか

○今こそ社会全体で「子どもが育つ環境」について真剣に向き合う時だと考える

まとめと今後の方向

保護者や子どもが約20年の間に変わってきたというデータを提示し、現場の保育者の「困り感」を浮き彫りにした結果となった。

この「困り感」は今の保護者や子どもにとって、どうなのか？困っているのは保育者だけなのか？

それは時代の変化・社会の変化なのか？

「親心をはぐくむ会」として、生活様式・社会状況が目まぐるしく変化していく中、「今」の親子に応じた寄り添い方を引き続き研究していきたい。またその研究結果を社会に示すことで、保育者の一助となることを目指す。